

目 次

まえがき	3
山上憶良歌を読む	9
杜甫の詩と放浪——詩語「狂」にみる杜甫の心性——	63
ワーズワスの世界	104
岩の顔と炎——ホーソーンの短篇をめぐる——	163
あとがき	195

長谷川神主のあげる祝詞とは明らかに異なる、幼少の子供にはやはり理解から遠い不可思議な言葉であった。しかし「タカマガハラニー」と耳に入って来る言葉は、歌のようで歌ではない、言葉のようで言葉だけではない何とも不可思議なもので、それが正月以外にも、非日常的な出来事に際して正に恒常的に用いられていたことを知るのには、建前の時に、「幣束」の前でも神棚の前でもない四方に真竹を立て、標繩を張った青空の下でも唱えられたことを知ってからである。

小学四年の頃には担任の教員が、弥彦神社に絡む神主であることも知った。これも不思議なことだった。こうした不思議に答えてくれたのが折口であった。

そもそも律文という概念に初めて出会ったのは、折口の「古代研究」を読んだときであった。「韻文・散文・律文」と並べて思われることは、「歌・物語（神話）・？」ということであった。神主長谷川氏によつて、元旦の朝決まって唱えられていたあの「タカマガハラニー」がそこに入るものかもしれないと何となく思われたのを思い出す。

折口の「祝詞」を読んだときには、発想の自由さを体験するとともに、憶良歌と祝詞の関わりをもふと思った。その思いは何に向かっているのか、これまでは問う材料を持たなかった。疑問に直面して大分時間が経過し、問題そのものが霞みかけていたようだが、放置出来ない側面があるように認められる。幸い教育現場の方向性と、民俗の中にあつた方向性とを相対化し得る視点を持ち得たように思われる。憶良歌を間に置いて、この際少しばかりの探求を試みて置きたい。

三 憶良の歌と祝詞

当面問題にしたいと考える憶良の歌は、周知のように『万葉集』に次のように記されている。

惑へる情を反さしむるの歌一首并せて序

或は人あり。父母を敬ふことを知りて、侍養を忘れ、妻子を顧みずして、脱履よりも軽みす。自ら倍俗先生と称ふ。意気は青雲の上に揚るといへども、身体は猶塵俗の中に在り。いまだ修行得道の聖を驗さず。蓋しこれ山沢に亡命する民ならむ。所以、三綱を指示し、更五教を開き、遺るに歌を以ちてして、その惑を反さしむ。歌に曰く

父母を 見れば尊し

妻子見れば めぐし愛し

世の中は かくぞ道理

鶉鳥の かからはしもよ

行方知らねば

穿査を 脱ぎ棄る如く